様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：２４２０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１２３６９

研究課題名（和文）成員カテゴリーを用いた会話の連鎖・参与構造の記述モデルの実証的研究

研究課題名（英文）An empirical study of a descriptive model of sequential and participatory structures of conversation using membership categorization

研究代表者
高梨　克也（Takanashi, Katsuya）

滋賀県立大学・人間文化学部・教授

研究者番号：３０４２３０４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：進行中の会話において「現在の話し手の次に誰が，何を話すか」という，会話参与者たちにとっての重要な関心事について，「成員カテゴリー化」の概念を応用した理論的枠組みの構築と実社会のさまざまな場面の会話データを用いた実証とを行い，成員カテゴリー化が会話の場における各参与者の参与役割だけでなく，共同活動の中で各参与者が分担すべき行為の種類などとも体系的に関わっていることを明らかにした．加えて，会話の場への各参与者の参与の仕方の多様性を成員カテゴリー化の概念を用いてより的確に捉えるための方法論の提案も行った．

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来は困難であった「会話のある時点において特定の参与者が特定の種類の発話を行うのは《なぜ》なのか」という学術的な問いに対する体系的な説明が可能になる．会話のそれぞれの時点で，「誰」が話し手になり「何」を話したかを事後的な視点から記述するだけでなく，「特定のその参与者」が「その発話」を行う《理由》までを予見的に説明できるようになるため，言語研究のみならず，組織科学などや医療コミュニケーションなどのさまざまな社会科学分野への幅広い応用も期待できる．

研究成果の概要（英文）：The question of "who speaks what next to the current speaker" is one of the most important concerns for participants in an ongoing conversation. In order to explicate this issue, this study developed a theoretical framework that applies the concept of "membership categorization", and conducted empirical examination by using conversational data from various real-world situations. The results revealed that membership categorization is systematically related not only to participation roles in a conversation, but also to types of actions each participant should take charge of in given joint activities. In addition, the modeling using the concept of member categorization also enabled to propose a methodology for analysts to more precisely recognize the diversity of participation styles in conversational settings.

研究分野：コミュニケーション科学

キーワード：成員カテゴリー化　会話連鎖　参与構造　社会的属性　会話分析　社会言語学　語用論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「現在の話し手の次に誰が，何を話すか」は会話参与者たちにとっての重要な関心事であるが，従来はこの点を体系的に説明できる理論やモデルはさまざまな関連分野のいずれにおいても十分に確立されていなかった．

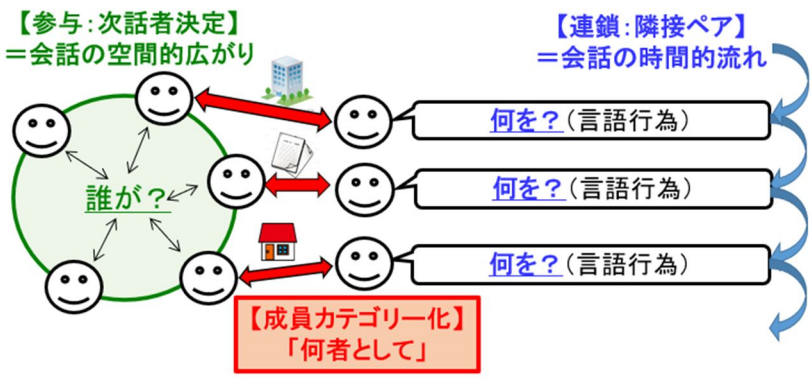
まず，言語学の枠内では，会話の行われている社会的場面の特徴や会話参与者の社会的属性の問題は社会言語学によって担われてきた．例えば SPEAKING モデルでは，人々の言語使用を「状況」「参与者」などの文脈的要因の観点から説明することが提唱されていた．しかし，社会的属性を会話のよりミクロな連鎖・参与構造の変化と関連づけて分析していくための具体的な手法は確立されていなかった．次に，語用論では，言語行為論についての古典的研究以来，さまざまな種類の言語行為の適切性条件として発話者の社会的権限という側面があることが知られていたが，個々の発話を切り離して分析対象とすることから，会話において当該の発話が聞き手にどのように受け取られ，どのような応答が得られるかという《相互行為的観点》は脆弱であった．そのため，本研究課題では，連鎖と参与といった会話分析の基本概念を出発点とした．

会話分析では，「誰が」という点は順番交替システムのうちの「次話者決定」などの《参与》の観点から，また「何を」は質問-応答や依頼-受諾といった隣接ペアを中心とした《連鎖》の観点から，それぞれ説明されてきた．しかし，現実の会話において「どの参与者が話し手になるか（誰が）」と「どのような内容・種類の発話をするか（何を）」という二つの側面が密接に連動し合っていると考えられるにもかかわらず，従来はこの「誰が」と「何を」の二つの問いは分離されてしまっており，両者を関連づけることは困難であった．

２．研究の目的

１の背景を踏まえ，本研究課題では，進行中の会話において，「現在の話し手の次に誰が，何を話すか」が決定されるメカニズムとして，《成員カテゴリー化》の概念を応用した理論的枠組みを提案することを目標と定めた．これにより，従来は体系的説明が困難であった「会話のある時点において特定の参与者が特定の種類の発話を行うのは《なぜ》なのか」という学術的な問いへの回答が可能になる．

成員カテゴリーとは，ごく簡単に言えば，性別や年齢，出身地，職業，学歴，文化など，社会の成員がもつ社会的属性のことである．つまり，当該の社会的行為を行っているのが「何者」であるか，ということである．従来の一般的な社会科学において，社会的属性は各社会成員が固定的に持っている文脈非依存な特性であると見なされてきたのに対して，社会学者 H.サックスは，社会的属性を表す諸概念がコミュニケーションにおいて参与者たちによってどのように文脈依存的に用いられているかという新たな問題関心に基づき，《成員カテゴリー化》というアイディアを提唱した．これは会話などの相互行為の場面において，人々が自己及び他者を「何者」かとして互いにカテゴライズ（分類）しているという点を強調したものであり，カテゴリー化の実践によって，各社会成員が持っている複数の潜在的な社会的属性のうちのどれが「特定の文脈において活性化しているか」という文脈感応的な側面を分析する方向性が開かれる．これにより，話し手は各発話（言語行為）を《何者として》行っているかという理論的な問いが可能になるため，この「何者として」という問いを接点として，上記の「誰が」と「何を」という二つの問いを架橋する説明が可能なモデルを提唱できると考えた．



しかし，その一方で，サックスの議論の焦点は発話内で言及される登場人物への指示 reference が社会的属性などの成員カテゴリーを用いてどのように行われるかという問題にあったため，本研究課題では，成員カテゴリーの概念を会話における参与役割の変化を記述するための分析概念として応用する可能性を模索した．

３．研究の方法

「会話コミュニケーションにおいて，いつ，誰が，どのような種類の発話を行い，これに対して，誰が，どのように応答するか」を体系的に説明できる枠組みとして，会話参与者の成員カテゴリーに基づく分析手法を構築するという目的のため，本研究課題ではさまざまな実社会場面で収録された会話コーパスを用いた理論・モデルの構築と検証する行うことにした．より具体的には，「会話のある時点で．ある成員カテゴリーが活性化されると，ある特定の種類の言語行為を実行しやすくなる」という作業仮説に基づき，詳細なデータ分析に基づく理論的・実証的な研究を進めた．

会話場面の種類に応じて，用いられる成員カテゴリーや言語行為の種類にも，また，それぞれに特徴的な言語表現や発話連鎖パターンにも多様性があることを想定し，多職種ミーティングやコンサルテーションなどの「職能中心型」や，各参与者が潜在的に有している複数の成員性を状況や文脈に応じて適切に切り替えることが重要な「コミュニティ型」などの，異なる場面・種類の会話データを対象とすることとした．

こうした異なる場面・種類の会話データを対象に，①言語行為と成員カテゴリーとの間の規範的結びつき，②言語表現と発話連鎖パターン，の観点からの分析を行うことにより，「会話のある時点において特定の参与者が特定の種類の発話を行うのは《なぜ》なのか」を会話事例に基づき実証的に説明できる体系的な理論的枠組みの構築を進めた．

４．研究成果

本研究課題では，2020 年 3 月頃から約 3 年間のコロナ禍の影響により，新規のフィールドワークに大幅な遅れや規模の縮小，見合わせなどが生じるとともに，実験場面での会話データ収集などは断念せざるをえず，既有データの分析やそれに基づく理論的観点からのモデル構築に重点を置くことにした．

対象として予定していた会話場面のうち，まず「職能中心型」の場面については，起業コンサルタントがクライアントからの信頼を獲得・維持していくために行っているさまざまな微細な相互行為上の工夫について，両者の間にある成員性の「二重の非対称性」という着眼点に基づく分析を行った．また，起業家支援のためのワークショップにおける参与者の指さし行動を分析し，指さしのタイミングや形状などが参与者の成員カテゴリーや発話と同時に行われている言語行為の種類などに応じて柔軟に使い分けられていることを明らかにした．これらの成果はそれぞれ異なる書籍の分担執筆などの形で発表した．さらに，栄養パトロール実践におけるスーパーバイズのコミュニケーションについて，スーパーバイザの持つ専門知と経験がどのような形で活用されているかを「仮説形成的聞き取り」という観点から分析し，研究会資料として発表した．

次に，「コミュニティ型」については，本研究課題の開始前から継続していた野沢温泉村の道祖神祭りの準備のための共同作業の調査について，既有のビデオデータの分析を進めるとともに，コロナ禍のその都度の状況を見極めながら，無理なく可能な範囲での調査も再開した．データ分析を通じて，各参与者の成員カテゴリーの違いに応じて，行為に着手する順序や分担すべき行為の種類，行為遂行の巧拙などの面での違いがみられることを明らかにした．こうした成果は関連学会での口頭発表だけでなく，共同調査者との共著の論文集としての刊行も準備しており，2024 年度に刊行予定である．

より理論的な研究としては，フィールドインタラクション分析という研究手法を提唱する英文論文の中で，成員カテゴリー化の分析が占める重要な役割について理論的に論じた．同様に，相互行為分析を認知科学の分野に応用するための工夫の一部として，成員性に着目する重要性と分析方法を考案し，同分野の講座論集の１章として刊行した．次に，会話における発話のアドレス(宛先)決定のメカニズムについて，従来のような視線などの表層的な手掛かりだけでなく，アドレスする/される参与者の成員性やこれに基づく共有知識の配分なども含めたモデルの再構築を行い，学会発表した．さらに広範な視点に立った論考として，成員カテゴリー化が近代社会における匿名性やこれに密接に関わる類型化といった社会学的な関心や，社会心理学における社会的スキーマ（ステレオタイプ）などの認知的倹約性についての研究関心，さらには霊長類学における個体識別の問題などとどのように理論的に接続されうるかを，論文集の 1 章において論じた．また，実社会でのコミュニケーションにおいては，成員カテゴリーはそれぞれの参与者の立場やそれに応じた関心事，懸念事項を参与者たちが互いに推測・認識するための有効な手掛かりとなっていることから，これが学際研究のための指針ともなりうることを著書の 1 章において論じた．

このように，本研究課題では，一連の分析やモデル構築を通じて，成員カテゴリー化が会話の場における各参与者の参与役割だけでなく，共同活動の中で各参与者が分担すべき行為の種類とも密接に関わってきていることなどを，さまざまな場面での実データの分析を通じてある程度まで明らかにすることができた．また，方法論の面でも，成員カテゴリー化に基づく会話の場への各参与者の参与の仕方の多様性を分析者がどのような工夫によって的確に捉えられるかという点に関して一定の理論的深化が図れた．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 高梨克也	４．巻 100
２．論文標題 スーパーバイザーによる仮説形成的聞き取りの構造：古典的AIの遺産を踏まえつつ	５．発行年 2024年
３．雑誌名 人工知能学会研究会資料SIG-SLUD	６．最初と最後の頁 148-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高梨克也	４．巻 37(6)
２．論文標題 生態学的相互行為分析から見た「私の経験」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人工知能学会誌	６．最初と最後の頁 735-742
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11517/jjsai.37.6_735	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高梨克也・丸山真央・相川陽一	４．巻 54
２．論文標題 山間地域における移動販売のコミュニケーション分析―地域コミュニケーション学に向けて―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 人間文化（滋賀県立大学人間文化学部）	６．最初と最後の頁 38-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24795/nb054_038-051	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高梨克也	４．巻 0
２．論文標題 個体識別と匿名性	５．発行年 2021年
３．雑誌名 出会いと別れ：「あいさつ」をめぐる相互行為論（木村大治・花村俊吉（編），ナカニシヤ出版）	６．最初と最後の頁 167-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高梨克也	４．巻 0
２．論文標題 維持されるものとしての発話の権利：クライアントの意向を尊重もしくは利用する	５．発行年 2020年
３．雑誌名 発話の権利（定延利行（編），ひつじ書房）	６．最初と最後の頁 165-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Katsuya Takanashi, Yasuharu Den	４．巻 37
２．論文標題 Field interaction analysis: A second-person viewpoint approach to Maai	５．発行年 2019年
３．雑誌名 New Generation Computing	６．最初と最後の頁 263-283
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s00354-019-00062-2	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高梨克也	４．巻 1
２．論文標題 「他者の発話を理解すること」の生態学	５．発行年 2019年
３．雑誌名 動的語用論の構築へ向けて（田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編），開拓社）	６．最初と最後の頁 168-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計23件（うち招待講演　7件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 高梨克也
２．発表標題 相互行為と他者の情動：プラグマティズムの系譜から
３．学会等名 科研費基盤研究Ｂ「仮想空間における宗教的遠隔治療に関する情動・感覚の文化人類学的研究」主催シンポジウム「情動と仮想空間－感覚を通じた距離と共在の再考」（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 高梨克也
２．発表標題 アドレス行動の認知語用論的モデル化
３．学会等名 日本語用論学会第26回（2023年度）大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 高梨克也
２．発表標題 フィールドインタラクション分析の技法としての「活動」概念
３．学会等名 ことば・認知・インタラクション10
４．発表年 2022年

１．発表者名 高梨克也・坂井田瑠衣・大塚裕子・池田佳子・石崎雅人
２．発表標題 リフレクティブな共在の仕方
３．学会等名 社会言語科学会第3回シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 高梨克也
２．発表標題 多職種連携における安心と信頼のための実践知の解明
３．学会等名 2019年度科学基礎論学会シンポジウム「安心と信頼の科学と哲学」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 高梨克也
２．発表標題 成員性と物質―野沢温泉村道祖神祭りのフィールド調査から―
３．学会等名 日本認知科学会第36回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 高梨克也
２．発表標題 「慣れることを避ける」仕組み：コミュニティ生涯発達の観点から見た野沢温泉村三夜講
３．学会等名 日本質的心理学会第16回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 高梨克也
２．発表標題 維持されるものとしての発話の権利―クライアントの意向を尊重もしくは利用する―
３．学会等名 第6回スカイライトコンサルティング株式会社協働研究コンソーシアム
４．発表年 2018年

１．発表者名 高梨克也
２．発表標題 私の行動に出会うために：二人称的現実と意のままにならない物質から始まる認知科学
３．学会等名 日本認知科学会第35回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 高梨克也
２．発表標題 言語使用を取り巻く日常生活環境のダイナミズムを捉える視点：成員性と関与
３．学会等名 第8回動的語用論研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 安井永子・高梨克也・遠藤智子・高田明・杉浦秀行
２．発表標題 相互行為における指さしの多様性－会話分析の視点から－
３．学会等名 社会言語科学会第42回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 高梨克也
２．発表標題 起業コンサルテーション会話における信頼構築・維持のための実践の解明
３．学会等名 シンポジウム「インタラクションと信頼」
４．発表年 2019年

１．発表者名 高梨克也
２．発表標題 「手段としてのコミュニケーション」をコミュニケーション研究の目的とする
３．学会等名 第13回電子情報通信学会ヴァーバル・ノンヴァーバル研究会年次大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計6件

1．著者名 高梨克也・坂井田瑠衣	4．発行年 2022年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 38
3．書名 日常生活場面の相互行為分析（鈴木宏昭編，認知科学講座３：心と社会）	

1．著者名 高梨克也	4．発行年 2023年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 11
3．書名 「他者の関心に関心をもつ」ということ（萩原広道他編，〈京大発〉専門分野の越え方：対話から生まれる学際の探求）	

1．著者名 高梨克也	4．発行年 2021年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 14
3．書名 フィールド調査とビデオ記録を用いた対話の分析（研究者・研究職・大学院生のための対話トレーニング，加納圭・水町衣里・城綾実・一方井祐子（編），47-60）	

1．著者名 安井永子・杉浦秀行・高梨克也（編著）	4．発行年 2019年
2．出版社 ひじつ書房	5．総ページ数 272
3．書名 指さしと相互行為	

１．著者名 高梨克也	４．発行年 2018年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 232
３．書名 多職種チームで展示をつくる：日本科学未来館「アナグラのうた」ができるまで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関